

生活科学への自然地理学的アプローチ (第2報)

—— 気象・気候に関する一般的文献について ——

井上啓男・広正義

An Approach Based on Physical Geography to Domestic Science (No. 2)

—— A Study of General Literatures on Meteorologic and Climatic ——

H. INOUE and M. HIRO

はじめに

最近地理学は隣接科学と密接な関係を深化させている。なかでも自然地理学の主流とされている気候学〔気象学の一部も含め〕は隣接科学として、生活科学上の諸問題との共同で学際的研究を進展させている。

筆者らは、定着した生活気候(以下生活気象も含めて)の研究が社会生活各分野の生活改善に多少とも役割を果たしていることを知る一つの方法として、一般的文献の収集と検索を行い、第1報(名女大紀要, 1981)として報告を行ったが、現状では生活と気候とのかかわりが拡大化していると考えられるので、第1報以降に刊行された一般的文献と補充を必要とする文献の収集と検索を行い目録を作成し報告する。

文献目録作成の方法

1. 生活科学の категория が広いので次の分野別に目録の作成を行った。
 - (1) 生活一般・衛生(疾病)・災害・経済(経営)・レジャーなどを対象。
 - (2) 異常気象・気候変動・気候変化と人間の社会生活との係わりを対象。
 - (3) 気候・気象に係わる随筆・文学。
(随筆や文学には、自然の見方を教える啓蒙的要素がふくまれ、四季や気象の移り変わり、過去から現代に致る生活観が読みとれる。)
 - (4) 気候・気象の歴史に関するもの。
(過去の生活と気候の係わりや気候が生活に果たした役割りを知る。)
 - (5) 気象俚諺・観天望気を対象。
(生活と気象・気候の係わりを経験的側面から把握できる。)
 - (6) 気象行政・気象業務に関するもの。
(生活のなかで、災害予知や防災対策の事態に直面したときに必要となる。)
 - (7) 気候に関する地図。
(生活に係わる気象・気候の状態が地図の上で一見できる便利さがある。)
 - (8) 気象・気候に関する基礎知識を得るためのもの。

(生活気象・気候は対象が広範囲にわたるので基礎的な知識を正しく、鮮明に理解することが必要と考えられる。)

2. 収集・検索した文献は日本気象学史(1941)を除いて昭和20年以後の単行本を主にしたが、一般的に生活と気象・気候に係わる知識を得るための文献にはどのようなものがあるかという問いに応えられるよう心がけた。
3. 収集・検索した文献(単行本)は、配列番号・文献名・著者(编者)名・発行所名・初版発行年度(西暦)・総頁数の順にカード上に記録した後、分野別に整理した。
4. 一般書を主体としたが、精読すれば一般人(専門家以外)でも理解できる専門書も一部収集・検索し、とくに生活科学諸分野と気候との係わりについて研究上一読を要するものは有効となるよう解題や内容紹介が行ってある。

生活一般・衛生(疾病)・災害・経済・レジャーなどを対象

- 101 気候順応：能 登志雄：古今書院：1966・152 P 人類は衣服や住居、生産活動などを通じて種々の気候条件に順応し、生活空間を拡大しつつけているので、気候順応は気候学の全領域と密接に関連しているということを地理学の立場から述べた数少ないものである。
- 102 風土の構造：鈴木秀夫：大明堂：1975：161 P 人間環境に最も深く関わる気候の最新知識に、新鮮な思考方法をもって、風土を論じている。動植物の分布と気候、人間生活と気候のなかの「気候と離婚の関係」、「大気汚染の局地性」は小気候下の生活に対して参考になる。
- 103 気象資源—地球を動かす水と大気—：中村政雄：講談社：1976・216 P 地球上の水と大気を、気象資源という新しい観点から見直し、その研究の現状と将来への見通しを紹介し、さらに人口増とそれともなう都市化の進展は、気象資源がますます重要になると主張。
- 104 新お天気百話：高橋浩一郎：朝日新聞社：1979：325 P 朝日カルチャーセンターで「気象学入門」と題して講義したもの。対象は教員、学生、会社員、公務員、主婦など幅が広く、一般教養という点に目標をあわせている。内容は気象現象と生活との係わり合いに重点をおいている。
- 105 植物の不思議な力＝フィトンチッド・B. P. トーキン・神山恵三：講談社：1980：198 P 森林浴がなぜからだにいいのか、フィトンチッドがあるからである。この驚くべき物質の正体を明かす書。生気象学のカテゴリーとして考えられる。
- 106 疾病の地理病理学：山口誠哉編：朝倉書店：1980・224 P 衛生・環境・保健等の問題を総合的にグローバルな立場から扱わねばならぬという見地に立った書。温度環境・気圧環境と疾病、人間活動と気候などの記述が参考になる。
- 107 五季と日本人—くらしの中の気象医学—：神山恵三：連合出版：1984：157 P サンケイ新聞に「健康カレンダー」の題で書かれたものに加筆したものである。日本の季節の移り変りを進めるのは温度ばかりでなく、降水もその代表値であるという主張から梅雨はひとつの雨季という別の季であるとし、日本は五季と強調しながらくらしへの影響をいろいろの視点から眺めているが、特色は、季節の変化にうまく体を調節していくくらしの中の気象医学についての記述である。
- 108 台風：大谷東平：弘文堂：1950：79 P 台風のことを、随筆風に流麗な文で書いてある異色の書。なぜ秋を中心に発生するか、高潮、原爆と台風の問題など将来への展望に至るまで、台風をあらゆる角度から解明にしている。
- 109 台風の話：大谷東平：岩波書店：1955：202 P 台風の現象をいろいろな実例をひいてだ

- れにもわかり易く説明したもので、台風の災害対策を根本的に考えるのに役立つ一冊といえる。
- 110 台風—猛威への挑戦—：荒川秀俊：社会思想社：1958：203 P 台風の進路に関する正常経路，転向，蛇行，迷走の説明と，台風とたたかう観測陣と研究陣についての記述は本書の特色といえる。
- 111 スモッグ：伊東疆自：紀伊国屋書店：1963：214 P スモッグ現象を鮮明にするための啓蒙書。スモッグの姿，スモッグを測る，スモッグ事件などスモッグにまつわる話題をたどって，スモッグ問題の輪郭が理解できる。
- 112 台風の科学—災害をどう防ぐか—：石原健二：講談社：1967：200 P 台風の実態を追究し，防災対策への根本問題に迫っている書。風，豪雨，高潮，波浪，塩風などによる災害の説明は一読の価値がある。
- 113 国土の変貌と水害：高橋 裕：岩波書店：1971：216 P 日本の水害史をふり返りつつ，新たな水害に備えるよう警告を提示した書。利根川大洪水(カスリン台風)・筑後川大洪水(梅雨前線豪雨)・これからの水害への対処などが記されている。
- 114 地震への挑戦—予知のための基礎知識—：萩原尊禮：講談社：1972：273 P 地震はなぜ起こる，地震は予知できるか，という素朴な疑問に答えて，地震発生のメカニズムについての新しい学説を紹介している。
- 115 地震予知：力武常次：中央公論社：1974：216 P 地震予知の新理論をわかりやすく説明し，大地震発生についての最新の見通しを明らかにする地震予知学の体系を説いた書。
- 116 地下街と人間—安全性の総点検—神山恵三：日本経済新聞社：1974：180 P 年々発展をつづけ，多くの人々が利用している地下街は安全なのか，酸欠空気による事故や火災時の群衆によるパニックはどうか，地下街の空気環境，地下街の災害など人間の立場から地下街の安全性を点検した書。
- 117 大気汚染：ポール・ショヴァン・アンドレ・ルーセル・持田 勲・持田明子訳：白水社：1975：120 P 気象学的観点から汚染の実態を説明し，汚染源の解明，被害の拡大，その人体，動物，植物への影響について言及している。また，立法，規制の面からとるべき方策を提示。
- 118 集中豪雨の話：二宮洸三：出光書店：1975：205 P 集中豪雨はどうして起こるか，大雨の予報や警報はどう受け止めるべきか，豪雨を中心にやさしく説明された気象学の書。
- 119 災害の科学：高橋浩一郎：日本放送出版協会：1975：214 P 地震をはじめ災害国日本といわれる各種の災害について，防災の権威者が，その構造や対策を，科学・行政・経済の面から探った書。
- 120 冷害と気象：木村耕三：総合科学出版：1977：294 P 現代の農業が寒冷化に耐えてゆくためには，それに応ずる技術を必要とするとの見地から，気候的地理的条件の差異に適応した対策と技術の確立を具体的に提言。
- 121 飢饉：荒川秀俊：教育社：1979：201 P 日本史上に残る名高い大飢饉の原因と実態を気象学者として実証的にあつづけたユニークな歴史書。食糧問題を再考深思する一助となる。
- 122 水害：一治水と水防の知恵—：宮村 忠：中央公論社：1985：221 P 公共事業に依存するあまりに，被害を大きくしている現代水害の実態を紹介しながら，各地に伝わる自主防災の知恵の再考を提唱した書。
- 123 気象で景気を読む—企業戦略としての気象情報学—：相楽正俊：PHP研究所：1982：216 P 気象の景気に対する影響，気象で景気動向を読むなどについて，多くの事例をとりあげ，企業戦略として気象経営学の必要性を強調。

- 124 気象経済学—ビジネスマンのための気楽な—・中村政雄・P H P 研究所：1982：219 P 気温と商売の関係，天気と戦う商売いろいろ，天気とエネルギー，気温と電力，天気に気をもむ穀物業界などが主な内容．天気と経済との関係について知識を深め，気象情報の利用を教える書．
- 125 気象・経済大異変・相楽正俊：廣濟堂：1983：256 P 気象予測で決まる 90 年代企業戦略を述べたなかで，衣料，電気機器，酒類，飲料，食器，薬品，木材，建設，漁業，エネルギーについての動向を探った書．
- 126 天気で儲かる：日本気象情報センター編：神戸新聞出版センター：1984：223 P ビジネスの決め手は天気とアイデア，健康管理も天気からなど，ビジネスから健康まで気象情報の効率的活用法について述べている．
- 127 お天気博士の経済学：朝倉 正：講談社：1985：215 P 気象と経済の関係は社会の関心が強いという主張から，内容の一つである気温の経済効果の一章が本書のタイトルとなっている．気温と経済のかかわりが事例をとりあげわかりやすく書いてある．
- 128 釣りとお天気—気になる関係—：長久昌弘：産報出版：1980：182 P 海岸に特有な気象や海象はもとより，釣りに係わり深い現象を季節ごとにまとめ，天気に逆らわず，うまく利用して安全に楽しく釣る法を要領よく記述している．

異常気象・気候変動・気候変化と人間の社会生活との係わりを対象とするもの

- 129 熱くなる大都市：尾島俊雄：日本放送出版協会：1975：245 P 廃熱または廃棄熱で汚染された都市の高温化，熱汚染対策の緊急性を，建築家として熱処理とエネルギー問題とエコロジーの立場から提言している．
- 130 氷河時代・鈴木秀夫・講談社：1975：189 P 世界各地で調査を重ね，関連諸科学の成果を総合して，グローバルな規模でヴェルム氷期の世界を復元し食糧・資源問題など人類の未来を予測．
- 131 気候変動と食糧—国際会議からのレポート—：高橋浩一郎編：大明堂：1977：188 P 1951 年に開催された総合開発機構 (N I R A) のシンポジウムにおける報告と討論を基礎にとりまとめたもので，食糧生産は気候条件に左右されることが多いという背景をふまえて，気候変動および食糧の問題とその未来について論述．
- 132 気候変動：山本義一編：東京大学出版会：1979：206 P 昭和 52 年から発足した文部省の特別研究「環境科学」の中の一つ〔気圏と人間活動〕班の環境問題へのアプローチを示したもので全 5 巻のうちの第 4 巻に当たるもの．過去の気候，気候変動と人間，気候変動モデルが内容となっている．気候変動の新しい専門書である．
- 133 ウェザー・マシーン—気候変動と氷河期—：N. コールダー・原田朗訳：みすず書房：1979：260 P 最近の異常気象をもたらした大気の構造と運動を探り，かなりの気候変動に対応するのは，人口の面でも，政治経済でもまた科学の問題でも困難ではあるが，おそらく上手に処理するだろうと論じている．
- 134 気候変化・長期予報—気候と人間シリーズ—：根本順吉・朝倉 正：朝倉書店：1980：208 P 異常気象の背景をなす気候変化の具体例を豊富なデータで詳細に記している．また長期予報が，経済活動を初めとした人間生活とどのように関わっているかを興味深く示した書．
- 135 飢えを呼ぶ気候—人類と気候変動—：R. A. ブライソン・T. J. ムーレイ・根本順吉・見角鋭二訳：古今書院：1980：210 P 気候変動は人類の文化・生活に大きな影響をあたえる

がその原因は自然的要因ばかりでなく、人類の文明の進歩と係わることを警告した書。

136 冷えていく地球：根本順吉：角川書店：1981：186 P グローバルな規模で進む異常気象を綿密に分析し、きびしくなる気象状況下で、環境対策はどうあるべきか、食糧自給率の低い日本のとるべき道など、地球と人類の未来に対する警告の書。

137 異常気象に備える—全天候型産業のすすめ—：朝倉 正：日本経済新聞社：1981：219 P 異常気象の実態・原因分析を行い、80年代の気候予測も詳細に紹介している。特に、食糧やエネルギーの生産との関係に多くのページをさき天候と産業との関連を明らかにし、経済戦略上からも気候情報の有効活用法、全天候型経営策など異常気象対策を提示。

138 気象大異変：相楽正俊：廣済堂：1981：261 P 独自の研究を重ねて公表した「相楽式天候予測法」を基本に、異常気象と人類の未来について、さまざまな角度から述べている。企業が気象情報を活用する事例は興味がある。

139 世界の食糧と異常気象：久保祐雄・谷 信輝：農林統計協会：1983：311 P 農林水産省における異常気象対応技術の確立に関する総合研究に参加した研究者を中心に気象・病害虫の専門家の協力を得、異常気象と作柄に関する最新資料を系統的に解説している。

140 気象の陰謀：インパクト・ティーム編・日下実男訳：早川書房：1983：265 P 地球の気候は、寒冷化に向かっていると分析し、新しい氷河時代の到来を告げるとともに、派生する食糧・人口問題をCIAレポートをもとに描いた記録。

141 異常気象レポート 84・気象庁編：大蔵省印刷局：1984：294 P 異常気象に対する関心が強まりつつある情勢に対応するため、異常気象の様相や最近の気候変動の実態を調査するとともに、アンケート調査による内外の見解、最近の知見を取り入れ気象庁がまとめた。

142 夏がなくなる日—明日を襲う気温激変と「温室効果」—：J・グリビン著・平沼洋司訳：光文社：1984：252 P 現在まで、人間は自然に順応して生活してきたが、近年は、科学の進歩ともあいまって、気象克服、自然環境支配の時代となり、その限界も明らかになりつつあるいま、新しい気象・環境順応の方法を発見する機会であることを提唱。

143 異常気象時代：朝倉 正・内嶋善兵衛・久保木光照・長坂昂一：講談社：1984：230 P 異常気象とは何か、どうして起こるのか、いつまで続くのか、社会、経済の影響はどうか、どのような対策をとればよいか等々、異常気象を科学的に理解したいという最近の強い要望をふまえて編集されている。南米ペルー沖のエル・ニーニョ現象が世界食糧需給、ひいては日本の各家庭の台所にまで影響するという記述などは、社会経済的異常気象の評価といえる。巻末の異常気象年表は、日本、外国にわたって記され、日本についてはその社会的影響も付記されている。

144 始まった気候変化：ヘルムート・E・ランズバーグ・古田菊夫訳：ハイライフ出版：1984：144 P 人間活動と気候変化の関係、気候に対する人間の適応性など、気候変化に関する14の論説をまとめたもの。

145 気候変動と人間社会：朝倉 正：岩波書店：1985：214 P 気候変動の実態と社会との関係を初めて包括にとらえ、とくに人間の生産活動が今後の気候変動の要因になることも確定的と述べている。また、気候変動の食糧生産への影響、異常気象と世界の食糧情勢、気候変動と日本の社会・経済など生活にかかわる問題を多くとりあげている。

気象・気候に係わる随筆・文学

146 ヨーロッパきこう：吉野正敏：古今書院：1965：199 P “きこう”とは紀行でもあり気候

でもあると言い、あるときは気候学者の目でものを見、またある場合は気象学者の手で資料を集めたという。ヨーロッパの気象災害、ヨーロッパの新聞天気図、ローマ気象台訪問記など、ヨーロッパの気候について、その一端を知るよい手引。

147 日本文学と気象：高橋和夫：1978：240 P 万葉集，古今集，枕草子，源氏物語，徒然草など，日本の古典に気象学の光をあて，台風・嵐の描写から過去の季節感や気象を再現し分析。

148 お天気おじさんうちあけ話：浅野 芳：家の光協会：1981：267 P 37年間にわたる予報官生活の体験を生かし，様々な天気につつまる話を綴ったもの。観天望気の真疑や異常気象の問答など，コクのある天気エッセー集。

149 天気とつきあう—気象歳時百話—：根本順吉：日本エディタースクール出版部：1982：243 P 日本の気象の特徴，日本人の天気とつき合う知恵を，日常生活の次元でわかりやすく説いているハンドブックである。コーヒーと天気，ゴールデン・ウィークの天気，避雷心得，気象と食糧問題など話題が豊かである。

150 気象と文化—肌の季節と光の季節—：関口 武：東洋経済新報社：1983：290 P 気象が文化に与える影響を，日本と欧米を例にとり比較文化論的に綴ったエッセーで，四季と文化，湿気と文化，絵画と風土などはなるほどと思わせる説得力がある。

151 日本列島の四季：岡林一夫：草友出版：1983：162 P 「赤旗」日刊紙婦人家庭欄に1年間にわたって書かれたもの。くらしにとって最も気になるものは天気という観点から，四季の移り変わりに現われるさまざまな天気をわかりやすく解説している。

152 気象野帳：安藤隆夫：創拓社：1984：196 P 朝日新聞「きょうの天気」の筆者がつづる春夏秋冬。観測現場での体験を生かし，日本列島の四季の移ろいをつづったエッセー集で，俳人でもある関係から古典の引用も楽しい。各頁ごとの50余の気象用語解説も参考になる。

153 暮らしの気象学：倉嶋 厚：草思社：1984：265 P 予報官生活30年の現場経験と研究に裏づけられた気象随筆。日本人が失い始めている四季への感性，先人が持っていた天気の知恵を思い出させる。気象のカルテ，異常気象はなぜおこるなど，内容が豊富である。

154 気象野帳II：安藤隆夫：創拓社：1985：223 P 日々の季節変化を淡々とした文章でつづり，日本の春夏秋冬，風土を語る随筆で，風土手帳といったほうが当たっている。季節ごとの話の末尾にある「フィールド・ノート」は幅広い「ミニ気象学」で参考になることが多い。

155 お天気博士の四季暦：倉嶋 厚：文化出版局：1985：297 P 1978年から1984年までの7年間にわたって，読売新聞の「婦人と生活欄」に，気象学をベースに故事来歴，詩，歌，短歌，俳句，小説，エッセー，ことわざ，アフォリズムなどを織りまぜて綴った天気博物誌。

156 お天気博士の気象ノート：倉嶋 厚：講談社：1985：311 P 1977年からの朝日新聞の夕刊「お天気衛星」という気象コラムの中のいくつかを集めたもの。春・梅雨・夏・台風・秋・冬の六季による日本の移り変わる季節の話題はその博識ぶりに感心させられる。

気象・気候の歴史に関するもの

157 日本気象学史：荒川秀俊：河出書房：1941：192 P 日本気象学史の骨組として刊行されたもの。したがって，「気象学史のスケッチ」が至言といえよう。各地の気象台史，測候所史，気象関係学会史，日本気象学書，人物伝について，1868年～1937年までを知る好適の書。

158 気象学発達史：荒川秀俊：河出書房：1947：174 P 世界全般にわたる気象学発達史である。気象技術史，各国の気象事業，国際気象組織，各国の気象学会，世界気象学者列伝などが内容となっているが，第二次大戦終了直後までが記されてある。

159 日本の気象—気象史の一断面—：気象学史研究会編：三一書房：1956：212 P 日本気象史のうち明治以後の気象学や気象技術の分析に重点をおき，困難な環境と条件のなかで気象にいとむ人びとを描いている。

160 お天気日本史：荒川秀俊：文芸春秋：1970：232 P 日本の歴史的イベントと天候をはじめとする気象現象との関係を探るユニークな書である。日本史の新視点ともいえる。歴史と天気，歴史に現れた災害を記したなかの事例は豊富である。

161 気象を見る眼：高橋浩一郎：共立出版：1974：160 P 特異日，最近の長期予報に関するもの，また異常気象の科学的解析に挑む気象研究の動向などを随筆風にまとめたもの。なかでも，気象 100 年の歩みは略史として参考になる。

162 気候の語る日本の歴史：山本武夫：そしえて：1976：243 P 我々の祖先が残した古日記や歴史資料を克明に解し，気象観測が始まる以前の歴史時代の気候変化を示しながら現在の気候が，どのような変化を経て，現在に至ったかを説き，歴史上の社会現象を気候環境の側面から見直すことを教えてくれる貴重な書。

気象俚諺・観天望気を対象としているもの

163 天候さまざま—風土論ノート—：根本順吉：玉川大学出版部：1974：234 P 生活体験をもとに，各地に伝わることわざをまとめた「天気俚諺百選」は民族学的気象史の土台。

164 観天望気入門—天気変化を自分で知る本—：藤井幸雄：青春出版社：1976：234 P 農業，漁業にたずさわる人々，一般の人々の海山のレジャーに観天望気をマスターする手引書として好適。内容で著者の 30 数年間にわたる研究成果と的中率が表にまとめてあるのは画期的。

165 異変予知の知恵袋：村上斗志夫：池田書店：1979：223 P 気象予知の俚諺が 370 項目にわたって収録されている。気象庁に保存されている資料をほとんど参照しているので予報官がよく参考になっているものがすべて紹介。

166 天気予知ことわざ辞典：大後美保編：東京堂出版：1984：380 P 全国に語り継がれた天気予知ことわざ 300 余の解説と，降雨・寒冷・天気変化・霧等々 5400 のことわざの収録。産業気象の研究者がその科学的根拠を解説。

167 災害予知ことわざ辞典：大後美保編：東京堂出版：1985：222 P 地震・干ばつ・水害・大雪・凶作など全国各地の災害予知に役立つことわざ約 2000 を網羅し，収集 40 年にわたる労作。

気象行政・気象業務に関するもの

168 気象最前線：全気象労働組合編：大月書店：1979：250 P 気象庁で働く人たちによる現場からみた日本の気象事業論。各種の観測・予報業務を紹介・解説している。また，将来の構想と労働組合としての政策も提起している。

169 気象と科学：増田善信：草友出版：1984：189 P 人間の社会生活は気象と深いかわりがあるということを前提に，国民本位の気象事業はどうあるべきかという問題点と今後の展望を述べている。

170 今日の気象業務：気象庁編：気象庁総務部広報室：1984：25 P 毎年度刊行される。気象庁のしごと，気象庁の組織，気象管署の配置，気象業務の国際協力など現在の気象庁の業務の全貌を知ることができる。

気候に関する地図

171 日本の気候図一目で見る日本の四季一財団法人気象協会(代表 毛利茂男):財団法人・気象協会:1957・70 P 1920年~1950年までの30年平均による各地の気候表を主な資料として、日本全国の気温や雨量などの分布がどうなっているか、天気日数はどうなっているかなど、日本の気候の全貌を目で見てわかるように作成。

172 日本気候図第1集・気象庁編:地人書館:1971:60 P 国際連合の機関である世界気象機構(WMO)の決議にもとづいてつくられた、わが国初の本格的気候図帳である。この第1集は、WMOの基準項目のうちの気温、湿度、蒸気圧、降水量、気圧、その他の月平均値の分布図が主体。

173 日本気候図第2集:気象庁編:地人書館:1972・90 P この第2集は、WMOの基準項目である年最深積雪、日平均雲量、月間日照時間などの分布図、気温、降水量などの階級別出現日数の分布図、また日本独自のものとして、台風の統計、強風、強雨、大気透過率の統計図などが主体。

174 日本・世界の気候図・浅井辰郎・新井 正・河村 武・西沢利栄・福井英一郎・水越允治・吉野正敏・東京堂出版:1985・163 P 最新の資料をもとに気温、気圧、降水量、風、湿度、雲量、蒸発量、日射量、積雪量などの基本的な気候要素ごとの分布図、およびこれらを総合した気候区分図や各種の指数分布図、グラフ類、そして植生図や海流図などの応用・参考図などにわたって、約140種類、約400図が収録され、解説も付されている。従来の古典気象学的な図集から進んで近代気候学的な立場に立った図も多く取り入れられている。

気象・気候に関する基礎知識を得るためのもの

175 天気予報と天気図:大谷東平・斎藤将一:法政大学出版局:1957:205 P 典型的な実際の天気図を示しながら、天気図の見方を教え日々の生活に便利でユニークな書。

176 日本の自然:中野尊正・小林国夫:岩波書店:1959:210 P 日本の自然の特性を、地形、陸水、海洋、気候など、その構成要素の相関しあう有様に重点をおいて記している。気候については、日本型気候、気候と生活、気候と植生が述べられている。

177 気候の教室:矢沢大二・前島郁雄:古今書院:1964:187 P 気候学を学ぶ場合に、押さえておくべきことがらの若干が指摘されている。大気候から微気候まで、気候要素・気候因子とは、気候表の利用、古典気候学の動向・近代気候学の動向、気候と人間生活などの内容がオーラル形式で記されてある。

178 天気予報—日本の空の診断書—:根本順吉:日本経済新聞社:1965・245 P 序章では古い時代から天気図を利用する現在の予報に至るまでの歴史、第一部では四季を追っての天気の特徴、第二部では天気予報の考え方と、認識の三段階論に学びながら説明した三つの部分で構成。

179 小気候調査法:小沢行雄・吉野正敏:古今書院:1965:218 P 第一報でとりあげた「小気候」では調査・研究法は付録として簡単にしか述べてないので、その姉妹編といえる。日照・日射・気温・湿度・降水量・風・大気汚染・植物季節など12章にわけて記述。

180 気象の話:ディヴィット・C・ホームズ:日下部文雄訳:時事通信社:1966:296 P 成層圏、大気の循環、電気現象をはじめ気象現象の利用まで新しい話題を盛りこんで、気象の謎と驚威をわかりやすく解説し在来の多くの気象解説書とは、著しく趣を異にしている。

181 気象の教室:斎藤鍊一:東京堂:1968:492 P 大気の運動、大気放射、高気圧、低気圧、

微気象，天気予報など気象学の基礎的知識について専門にも通俗にも片よらず，系統的にやさしく解説。

182 雲と雷の科学：孫野長治：日本放送出版協会：：1969：212 P 気象研究 30 年の蓄積をもとに，雲，雪，雨，雷などについて科学的に楽しく書かれた最新の科学書。

183 海洋と気象：富永正英：共立出版：1970：177 P 海洋開発シリーズのなかの一冊。海が大気におよぼす影響，海上で遭遇する気象現象，海洋開発と気象など，気象の問題をつねに海を意識しながら語っている。

184 気象の謎：内田英治：大陸書房：1971：254 P 日本列島の気象の奇現象とされている乱気流はなぜ起こる，文化の日は晴れる率，気象の予報とコントロールなど，気象のミステリーの総集といえる書。

185 生態学からみた自然：吉良竜夫：河出書房新社：1971：295 P 生態学の根本的思想を明らかにし，グローバルな自然像を提示した書。日本文化の自然環境のなかに図示されている生態気候区分図とその説明は本書以外にはない貴重なもの。

186 気候は変えられるか：P. M. ボリソフ・高野健三・都司嘉宣訳：共立出版：1972：230 P 豊富な知識と多くの科学データにもとづき，地球全体の気候改良の構想を述べている。局地的気候改良と全地球的気候改良，北極海の湾流，気候改良の第一段階などが主な内容。

187 気象の未来像—理想の姿を求めて—：飯田睦治郎：日本放送出版協会：1972：222 P 人間の生活環境に有利な気象制御・気候改造などを，人工降雨，台風や降雪・雹害のコントロールなど具体的方法で語っている。

188 天気予報—理論と実際—：高橋浩一郎：海洋出版：1977：126 P 天気予報の基礎，観天望気，地上天気図による予報，数値予報など，専門家以外の一般の人が，ここ 1，2 日の天気を予測する場合の方法を中心として書かれてある。

189 天気予報の科学：高橋浩一郎：日本放送出版協会：1980：222 P 天気図の見方の基礎から，産業・生活への影響などの応用面，また，気象情報の意味，気象業務等について総合的に解説されたもの。

190 日本の自然：阪口豊編：岩波書店：1980：270 P 明治以後つづいてきた欧米流の見方で日本を見ていた従来の態度から離れて，日本の自然の性格を世界の他の地域との比較のなかでとらえ，大観することを主眼としている。日本の豪雨・豪雪などは，日本の自然を考えるときの基本書で，自然保護・災害・国土開発を考えるときのよい指針となる。

191 新しい気象学入門：飯田睦治郎：講談社：1980：258 P 天気を左右する要因は何か，さまざまな気象現象のからくりを，最新の説を紹介しながらわかり易く解説している。

192 お天気と気象のことがわかる本—明日の天気を知り，暮らしとビジネスに活かす法—藤井幸雄：日本実業出版社：1982：230 P 雨，風，雪，梅雨，台風，異常気象など天気・気象に関する「なぜ」が氷解し，天気情報の利用法などが興味深くわかる。暮らしとビジネスに役立つ知識を得るのに好適の書。

193 お天気の科学—天気図づくりから予報まで—：一色 明：文泉：1982：230 P ラジオの気象通報をもとに天気図を書き，局地予報ができるまでを，観天望気の知識と合わせて，わかりやすく解説。

194 気象衛生「ひまわり」の四季：飯田睦治郎・渡辺和夫：山と溪谷社：1982：144 P 新聞やテレビの天気予報欄，番組に欠かせない情報として身近になった「ひまわり」のシステム，雲画像の見方，利用の仕方などの解説と，四季折々の雲画像のアルバム。

195 天気予報があたる本：ピエール，P. コーラー・西成勝好訳：東京図書：1983：178 P フランスでの一般向き天気予報書の訳。テレビや新聞で報道される天気図中心の予報でなく、前線と気団を重視した予報のしかたを紹介している。天気の人間の感情や生活との関連、天気のことわざも多数収録。

196 新天気予報の手引：安斎政雄：日本気象協会：1983：148 P 1952年に、天気図の見方から天気予報についてわかりやすく解説した予報の手引書として刊行されたものをしっかりとした知識をつけるよう全面的に改訂し新版としたもの。

197 天気予報の科学：渡辺和夫：福武書店：1983：96 P もっとも新しい気象学そして天気予報分野の書である。気象のメカニズム・異常気象・天気予報と暮らしなどをカラー写真や図版を豊富にとり入れて記している。

198 季節の旅人—風のたより雲のふみ—倉嶋 厚：廣済堂出版：1985：267 P 内容の一つに天気図を見るコツというタイトルで、1月から12月までの天気図の典型を天気図の略図を添えて述べているのは、天気図の基本を学ぶよい指針となる。

199 天気予報の話：内田英治：中央公論社：1985：210 P 気象庁の天気予報を現代的立場を主にして、やさしく総合的に記している。予報発表のいろいろ、天気図の客観解析、グローバルの視野に立ったまわりの動き、将来の展望などが主な内容。

200 おもしろ気象学—春・夏編—倉嶋 厚編：朝日新聞社：1985：200 P 季節季節に現れる気象現象から天気ことわざ、各地の天気確率、異常気象まで、豊富な図・写真・データを付して解説。くらしに密着している気象を積極的に利用し、快適な生活を送ることを提案した書。

あ と が き

本稿は、第1報(名古屋女子大学紀要、第27号、1981)につづいて生活科学に係わる気象・気候の一般的文献100書目の収集と検索を行って作成した文献目録である。

第1報の報告以来わずか4ケ年であるが、生活科学の諸問題と係わった気象・気候の研究は多方面に亘って拡大され深められている。

例えば、異常気象・気候変動は食糧生産対策や各種の日常生活とそれに関連する各種産業の経済・経営問題に新たな対応策を迫ることが多くなっているし、また、時には生活にダメージを与える各種の災害は多発の傾向にあり、それに対する予知問題や防災対策の研究は切実な課題となっていることなど、その一端をのぞくことができる。

本第2報では、生活に係わる異常気象・気候変動の文献を重点的に補充し、災害に関しては、気象庁の管掌業務になっているので地震関係の文献を災害関係のなかに補ってある。さらに過去を知り、現在を認識し、未来を予測し、過去の経験を将来に生かすことが現在に生きる者の義務と考え、生活に係わる気象・気候の歴史、天気俚語、気象・気候に関する随筆・文学、そして生活に必要な気象・気候要素が容易に利用できる気候図等々を新しい分野として補充してある。

生活気象・生活気候の一般的文献が年とともに需要を高めることは必然的であり、第2報以降も文献の収集と検索は必要な研究課題となることが考えられる。

参 考 文 献

- 1) 石田竜次郎，吉野正敏：地理学研究のための文献と解題，51～64，古今書院(1969)
- 2) 山下脩二：地理，22，第12号，26～32(1977)

- 3) 大矢雅彦：地理, 25, 第1号, 19~27 (1980)
- 4) 井上啓男, 広 正義：名古屋女子大学紀要, 27, 255~265 (1981)
- 5) 講談社ブルーバックス編集部：科学の本の本 (地球科学—根本順吉—), 39~65, 講談社 (1984)